

胥靡、築於傳險。見於武丁。武丁曰、是也。得而與之語。果聖人。舉以為相。殷国大治。故遂以傳險姓之、號曰傳説。

〔『史記會注考証』本より引用〕

〔口語訳〕

ある夜、武丁は夢をみて、夢の中で聖人に出合った。その名を説といった。その夢に見た人相の者を求めて群臣百吏の顔を熟視したがみな違っていた。そこで百官を動員して似顔絵を作らせて民間に説に似た人を探させた。そして山西省の傳という岩窟の中で説を探し出した。この時、説は囚人で道路工事に使役されていた。召し出だされて武丁に目通りすると、武丁は「この人だ」といった。そしてともに語ってみると、果たして聖德の人であった。挙げ用いて宰相とした。殷は大いに治まった。故に傳險にちなんでこれを姓として与え、傳説といつた。

〔新釈漢文大系本の「通釈」より引用〕

補説②

○56句目「范舟湖上扁」に込められた故事について

一、【范蠡の故事】（『史記』卷二二九、「貨殖列伝第六十九」）

范蠡既雪会稽之恥、乃喟然而歎曰、計然乃策七。越用其五而得意、既已施於国、吾欲用之家、乃乘扁舟浮於江湖、變名易姓、適齊為鴟夷子皮、之陶為朱公。

〔『史記會注考証』本より引用〕

〔口語訳〕

范蠡は会稽の恥をすすいだ後、やがて大きなためいきをいって言った。計然が述べた方策は七つあった、越の国はそのうちの五つだけを用いて思い通りになった、国家において実効があった以上は、わしはあのやり